

「道民の森民活事業」中止と代替策をめぐる動き

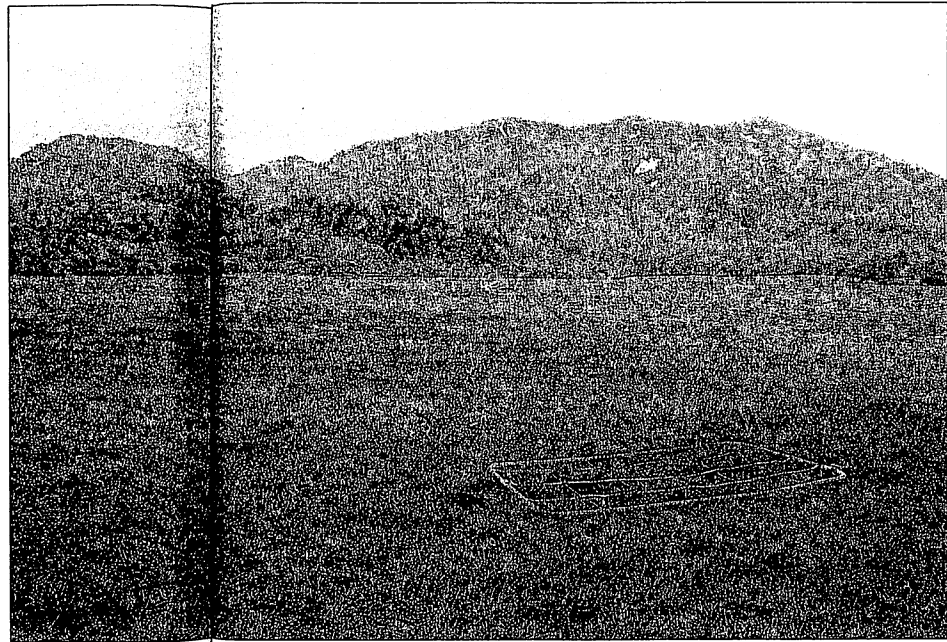
ルポライター 滝川 康治

箱もの優先の発想やめて 住民・行政で再考の場を

水源地の山に リゾートは不要

当別町市街地から四十キロあまり北に行った神居尻地区は、当別・月形町の五カ所に分かれた「道民の森」のひとつ。神居尻山（標高947メートル）の麓には、最近オープンした森林学習センターをはじめ、宿泊施設や野外活動に利用できる各種の「森」が整備されている。

ここに隣接して五百ヘクタールほどの町有牧場がある。わたしが訪れた五月下旬、まだ牛馬の姿はなく、広大な草地は静まり返っていた。この一帯はかつて、「道民の森民活事業」の予定地とされたところ。今ころは一大リゾート



神居尻山（右手）にスキー場、手前の町有牧場のところにゴルフ場などを造る計画があった。頓挫しなければ、今ころは一大リゾート地になるはずだった

当別町の「道民の森民活導入事業」が道の「時のアセスメント」によって中止されて1年あまり。道は中止後の代替振興策を地元を示したが、本格的な協議はこれからだ。ダム湖上流への「環境の村」設置には、市民団体が見直しを求めている。当別ダム建設の是非を含めて議論を深めるときではないか。

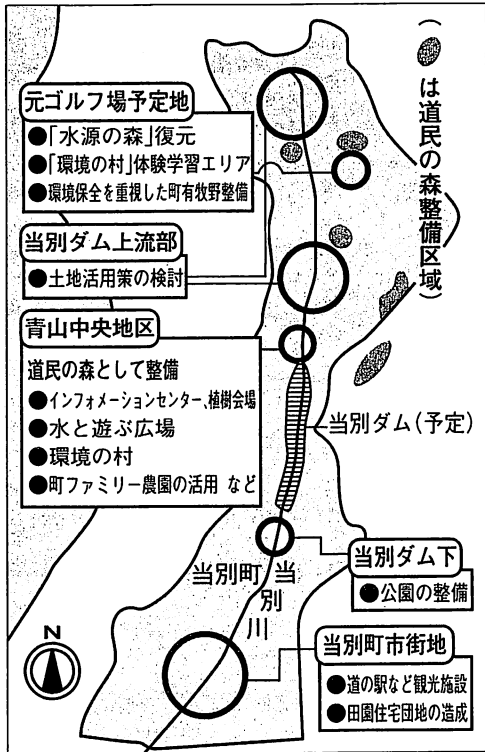
画がある。同町の配野行雄企画部長が「その波及効果や雇用、地域振興の面から、民活事業には期待していた」と振り返るように、町は、この事業をダム建設による地域の衰退を防ぐ振興策にも位置づけて、積極的に協力した。冬は八十人、夏は六十人ほど、通年で雇用が確保されると聞いて、「水没地とその上流、青山中央地区」の人た

ちは仕事をなくすので、民活事業で働いてもらおうと思った（町関係者。商工業者らの期待も大きかった。地元住民のなかには、「雇用確保といっても、（水没予定地の土流は）ほとんどが高齢者で、実際に働ける人はそんなにいない」と冷静に見る人もいたが、行政関係者らはリゾートに過大な夢を抱いて突っ走った。

ダム湖の水質に負荷を与えることから、スキー場予定地の保安林の伐採やゴルフ場の造成に反対運動が起きた。九五年には水質保全についての意見を付けて環境アセスメントの手続きを終了したものの、札幌市や石狩市から「水源上流でのゴルフ場開発は好ましくない」との見解が示され、計画は足踏み状態になった。

九七年夏、道は「施策が長期間停滞するおそれがある」を理由に、この事業を「時のアセス」の対象にした。そして昨年四月、水源地上流に位置するゴルフ場、スキー場は「道民の森」の施設としてそぐわない」と中止の結論を出し、会社側に伝えている。

事の顛末はこのようなものだった。リゾート誘致を進めた道は結論のなかで、事業予定地を「道民の森」に編入する新構想を示し、のちに全町的な振興策もまとめた。が、その身をめぐって、いま、さまざまな動きが出ているのである。



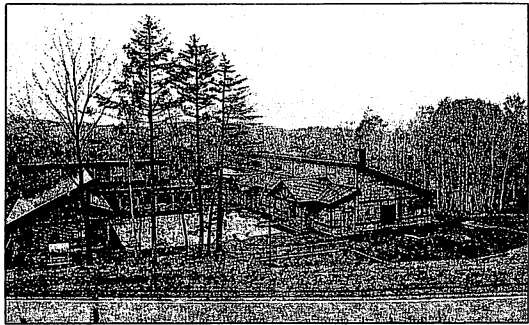
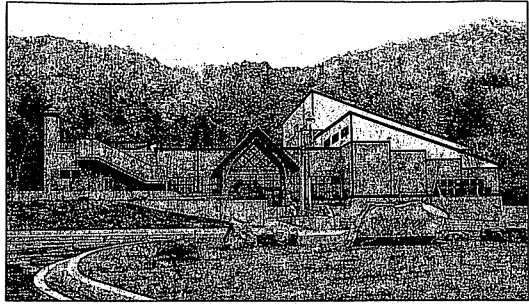
道がまとめた支援策の対象エリア図

経済効果を試算 代案で損失補う

リゾート誘致に大きな期待をかけた地元自治体や商工業者らを残念がらせた「中止決定」のあと、会社側との協議もなされた。

前川製作所は環境アセスにかかった費用の補てんを道に求めており、道側も応じる姿勢で損失額の確認作業を行なってきた（道森林整備課の話）という。が、損失補てんの金額面で折り合いがつかず、最近、会社側が損害賠償を求める裁判を起こした。「未決着で協議中」として、道は事の顛末を詳しく語ろうとしない。

「中止」に伴う代替策を検討することは、「時のアセス」の再評価調査のなかに明記されている。道は昨年六月、市内七部の係長クラス十七人による「道民の森計画検討会」を立ち上げ、半年間にわたって代替振興策を協議。「時のアセス」の公聴会で意見を聴いた九つの団体にも、文書で意見を出してもらった。



「道民の森」に建設された森林学習センター（上）と宿泊施設（下・後ろがゴルフ場予定地だった町有牧場）

たる三千人の住民がゴルフ場などの開発に反対する署名をした経緯がある。この運動に携わった住民の間には、道の代替策によってタムの水質に対して負荷を与えないように求める声が強し、という話も聞いた。

町有牧野の扱いも不透明な状態になっている。「町が希望するなら土地を購入し、「水源の森」にしたい」とする道に対して、町農林課では「牧場運営の中身を変える気はない。民活導入前に立ち返り、従前どおり運営していく」

今年一月、道がまとめた振興策が当別町に示された。

民間コンサルタントの調査結果をもとに、ゴルフ場とスキー場の年間入り込み数二十六万五千人のときの観光関連業者の売上高や波及効果による所得額、消費の喚起、税収増などによる経済効果の総額を十五億円弱と試算し、こうした経済効果に見合う施策を整理したものだ。次のような振興策を挙げている（別項の図参照）。

- ① 町有牧野の利活用対策「水源の森」として森林の復元、「環境の村」のフィールド系体験学習エリアとしての活用など
- ② 青山中央地区の整備対策「環境の村」の施設整備、来年三月廃校予定の青山中央小中の利活用など
- ③ 「道民の森」に関わる観光など産業振興対策「産地直売所」併設する観光施設（道の駅など）の整備、優良田園住宅の建設、当別ダム下の園地整備など
- ④ 「道民の森」に関わる雇用対策「地元森林組合などへの施業委託」「環境の村」の施設管理委託や観光施設の整備に伴う新規雇用など

つまり、ゴルフ場やスキー場の造成で生じるはずだった経済効果を、「道民の森」の整備と絡めて町内各所に割り振ろう、というものだ。このうち②と③（直売所を除く）は、ダム事業の周辺対策の色彩が濃い。

道水産林務部はこの振興案について、「こちらから案を示したのは、評価・判断にあたって今後の対応方針を出す、という「時のアセス」の精神によるもの。市内の検討会では、事前に案を出すことは是非をめぐり、いろいろな意見があった。（まとめた案は特に目標年次は設定しておらず、地元への助言などで応援し、できるものから対応していきたい）」（森林整備課）

と、地元との事前調整に基づく行政手法との違いを強調する。

町は過大な要望 詰めはこれから

道の振興案に対して、地元側は三月末、町長と町議会議長の連名で道に要望書を提出した。総論に異存はないが、各論では「あれも、これも」の要望。置を」と二重投資を要望することも理解に苦しむ。

「環境の村」に 市民団体が異議

代替案の目玉のひとつ「環境の村」に対しては、札幌市と石狩市、当別町の七市民団体でつくる「当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会（安藤加代子代表幹事）から、計画の見直しを求めめる声が上がっている。

「環境の村」は、道が九四年に策定した環境学習推進方針のなかで整備の必要性が指摘されていた。道は九六年、ダム後背地の青山中央地区の百五十ヘクタールを「道民の森」の用地として買収することを決めたが、民活事業が中止になったので「環境の村」を代替案のなかに入れた経緯がある。ダム周辺対策を求める地元と、「村」をつくらうとする道の利害が一致した格好だ。九七年秋に有識者らによる検討委員会（道の諮問機関）が設置され、今年

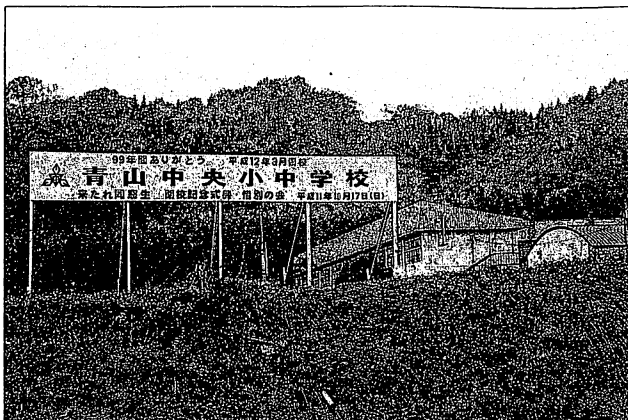
かつてのゴルフ場予定地への「森林学習館」の設置や青山中央地区へのインフォメーション施設の設置、ダム湖での魚の増殖・放流、漁業権の取得、カーン関連施設の設置、道営物産館の設置と、箱もの優先、ずいぶん虫のいい要望を盛っている。

前出の配野企画部長は「道が全部やってくれば万全だが、（財政負担など）町のやるべきものもある。その点では厳しいものがある、と感じている」と話す。

商工業界は物産館に期待が大きい。「切り花全道の町でもあり、（市街地周辺の）通過拠点に物産的なものが扱えるものが一番の期待。当別の町に入ってみよう」というものがほしいし、そこから町おこしをしたい（山川信幸、当別町商工会事務局長）

が、関係者以外の関心はそう高くはない。中止後、振興策について行政側から住民への投げかけはなされていない。とか。道の振興案が報道後も「住民から特に意見は出てこない」（町関係者）というのも、これでは当然すぎるほどの帰結なのだろう。

町内では数年前、人口の一五％にあ

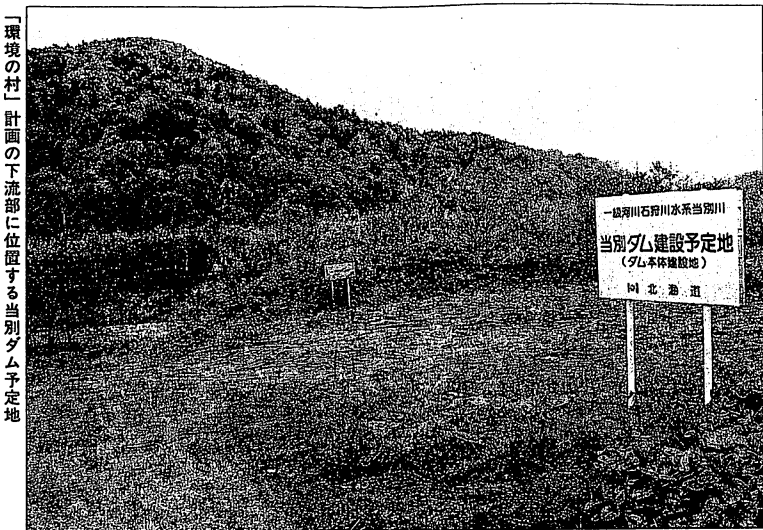


青山中央地区は移転準備中。廃校となる学校付近が「環境の村」の拠点

湖では、環境学習の場としてミスマッチではないか。ダム事業そのものは、水没予定地住民の移転がほぼ終了し、導水管の布設工事が行なわれるなど、ダム本体の建設に向けて進んでいるが、再評価の議論は今からでも遅くはない。ダム計画が根本から見直されるならば「水源の上流に『環境の村』は似合わない」といった話も、新たな着地点を見いだせるかもしれない。今後、行政と札幌圏住民の間で掘り下げた議論が起ることに期待したい。

峡・定山溪両ダムに次ぐ「第三の水がめ」としての位置づけが大きい。このダム、過大な公共投資になる懸念がある。札幌市では豊平川水系の既得水利権に余裕があり、石狩市なども給水人口の伸びが鈍化している。地質的な要因などから、ダム湖の水質悪化が予想される。減反などで当初の予測ほど農業用水の需要がない——といった

た事実を指摘できる。わたしは、当別ダムを「時のアセス」の対策事業にして、しっかりと再評価すべきだと考えている。現状では、前出の市民連絡会が昨年来、水需要の鈍化を理由にダムの縮小を求めている程度で、ダム事業をめぐるとの議論はまだ少ない。が、「環境の村」の直下に濁った水をたたえるダム



「環境の村」計画の下流部に位置する当別ダム予定地

「環境の村」計画の下流部に位置する当別ダム予定地。建設予定地の看板が写っている。周囲は山々で、建設現場の様子が伺える。

「時のアセスの中止理由」と「村」との整合性がない。「道民の森」のなかに施設がたくさんあるのに、いままら新たな施設が必要なのか」と疑問視する代表幹事の安藤さんは、「何かを造ってそこで働くというのでなく、森の案内人を育てたり、花卉栽培を活かすような地域振興策を考えられないか。地域の人たちが意見を出し合い、行政と話し合って振興策を決めることが大事。最初は野幌に計画した、とも聞く。『村』の構想自体は素晴らしいので、水源の上でなく、ほかの自治体への設置を考えるといい。ダム湖に飲み水を貯める」という事実を見て、これ以上の（ダム上流域への）入り込みで負荷を高めないでほしい」

今回の代替策は、民生活業の挫折と、道内では最後となる多数の住民移転を伴う大型ダムの地元対策という、道の二大事業の狭間で生まれたものだ。このうち後者について、わたしは九七年七月号で取り上げたことがある（北海道環境リポート②）「当別ダム事業は本当に必要か」。

三月まで基本計画のあり方を論議してきた。青山中央小中のところを拠点に、十六ヘクタールの「村」をつくり、学習・人材養成・情報交流・調査研究支援企画調整の五つの機能を持たせる。ワークショップの実施や各種研修、環

境問題についての展示などを行なう、といった構想である。「自然環境や新エネルギー、ゴミ処理、二酸化炭素の抑制など、すべての環境問題を含めた体験型のものを検討中。昨年、『村』の具体的なアイデアを募集し百六十一件の応募があった。それをどう活かすのか、これからの課題になっている（道環境政策課）

同会は三月、知事と検討委員会に質問書を提出した。道は「最善の排水処理法を採用し、水源に影響を及ぼさぬよう計画を進めたい。『村』と『森』は一体で取りくむことが効果的」などと回答しており、根本的に見直そうとする姿勢は乏しい。同会は、事業の進め方などについて道に説明を求めるとい

当別ダム計画と村構想の検証を

この問題、道が構想の前身を地元住民らに詳しく示し、「本当に当別町に必要な施策か？」を含めて、じっくり議論してみてもいいだろうか。